人・環境・建築への旅

北海道・道南を歩く

自然・歴史そして人情の未来を想う

建築家 棚沢成明

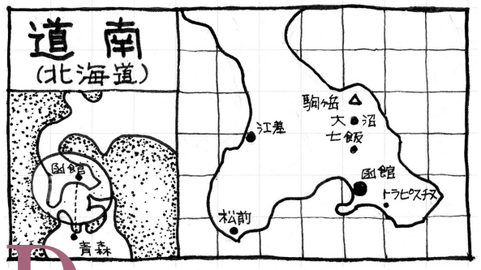
多くの旅人を惹きつけてやまない北海道の雄大な自然（トラピスチヌ修道院にて）。

強い波に浸食され、あちこちに奇観を生み出している立待岬。

2007年から就航した高速双胴船は、函館－青森間をわずか１時間45分でつなぐ。

函館山からの眺めは、香港、ナポリと並んで世界三大夜景のひとつとされている。

駒ケ岳を望む大沼国定公園。北海道では、観光地として人の手が加わり保護されることで、自然が守られているケースが多い。



Dounan

鰊漁たけなわの頃の街並みを整備、保存した江差の「いにしえ街道」。

ヒマラヤと江差を結ぶ馬追い歌が教える歴史

今年7月には洞爺湖（とうやこ）でサミットが開かれる。かつて政治と経済が主題であったサミットは、今や世界の温暖化をいかにくい止めるかという、環境問題を論じることが主たる目的となった。僕の旅もいつからか、その地の自然を見、異文化にふれることを入口にして、地球環境について、自ずと思いをめぐらせる旅へと変わっていった。

檀一雄の書いたものに、「いつの日にも、自分に吹き募ってくる天然の旅情にだけは、忠実でありたい」と、僕の心境に重なる一節がある。30年前、ヒマラヤへの飽くなき憧れを抱きながらも、まだ「忠実」になって訪れることができないでいた頃、車のラジオから、今は故人となった芸大の小泉文夫氏（１９２７～１９８３年。民族音楽学者）の声が流れてきた。「江差追分」に到達するまでの「追分」のルーツを述べられていた。長野県の馬子唄「信濃追分」が新潟に流れ、北前船で道南に渡ったということは、多くの人によって語られている。それでは信濃高原の馬子たちには、どこから伝わったのだろうか。小泉氏は、モンゴルからチベット高原の馬追いの民族に、追分につながるものを感じたのだ。

その当時の僕にとって、それは驚異的な発想で、信州から、いやモンゴル、チベットから道南にまでたどり着いた歴史の中で、「江差」という地名がなぜか深く心に刻まれた。